

第一・二指を捻じる転法輪印阿弥陀如来像について

北澤菜月（奈良国立博物館）

日本における転法輪印（説法印）相の阿弥陀如来像は、京都広隆寺の阿弥陀如来坐像や、奈良当麻寺の当麻曼荼羅原本中の阿弥陀如来像など、奈良時代に多く見られることが知られる。それゆえこの印相は平安時代に表されはじめる定印（弥陀定印）や、いわゆる来迎印と比較し、「古様」あるいは「南都系」の印相と評される。しかしながら、大きく捉えれば転法輪印に含まれるものの、奈良時代には見られず、平安後期以降に阿弥陀の印相としてあらわれる印相がある。それが特に、第1・2指を胸前で左右対称に捻じる形式をとる印相である。

転法輪印相にはその捻じる指や両手の合わせ方などから幾通りかのバリエーションがあるが、そのうちほとんどは何らかのかたちで経軌典拠を確認することができる。しかしながら今回問題とするこの印相については明確な典拠がみつからない。それゆえこの印相については、典拠をもつ転法輪印の一変形と理解されることも多いが、実作例をよくみると、平安後期以降、その印相をもつ阿弥陀像は意外と多く製作されていることに気付かされる。

彫像では奈良法隆寺・阿弥陀如来坐像、和歌山金剛峯寺・阿弥陀如来坐像など平安後期にみられ、絵画でも鎌倉前期製作と見られる京都安楽寿院や奈良松尾寺の阿弥陀聖衆来迎図中の阿弥陀、また奈良国立博物館・阿弥陀浄土図や、京都海住山寺・阿弥陀浄土図、京都清凉寺・阿弥陀浄土図、京都金戒光明寺・地獄極楽屏風中の阿弥陀浄土など、鎌倉期の阿弥陀浄土図中の阿弥陀、さらに一連の山越阿弥陀図や京都知恩寺・十体阿弥陀像のような鎌倉中後期に成立する新たな図像中にも見られるようになる。またその彫像や絵画作例の製作が行われ始める頃、白描図像集のなかにその印相が阿弥陀のものとして散見されるようになる。

阿弥陀の転法輪印の一種としてのこの印相については、先学によって検討が加えられ成果が出されており、絵画では京都知恩寺「十体阿弥陀像」に関する論考の中で泉武夫氏が重要な指摘をされている（同氏「十体阿弥陀像の成立」『仏教芸術』165、1986年3月初掲、のち『仏画の造形』吉川弘文館、1995年8月、収録）。だが、この図像をもつ作品は主流ではないためか等閑視されがちであることは否めない。それゆえ発表者はその一作例に数えられる奈良国立博物館の阿弥陀浄土図を紹介したことがある（「奈良国立博物館所蔵阿弥陀浄土図の図様と表現」『鹿園雑集』第九号、2007年3月）。

しかし、特に鎌倉中後期の浄土教絵画中の名品であり、かつ、この時期突如、新たに現れる図像である禅林寺本をはじめとする「山越阿弥陀図」や「十体阿弥陀像」に、この印相が表されることを考えると、これら鎌倉期浄土信仰絵画の成立背景を考察する上で、この印相をめぐる様相を理解することは重要と思われる。そこで本発表では、上に挙げたような作品群の特徴を捉え、特に鎌倉期を中心とした阿弥陀浄土信仰中に現れてくる意味を意識しながら、この印相の周辺を探ることにしたい。